

上地の山が動いた!!

上地学区

UEJI

1968年(昭和43)

山が

動

いた

た

!!

2012年(平成24)

最近の上地は、森林など自然が少なくなっています。私が考える100年後の上地は、ますます自然が減り、ビルなどの大きな建物がたくさん作られていくのではないかと思います。

でも、自然はとても大切なものなのです。100年後の上地が、100年後の人たちにとって住みやすい環境を残していたらいいと思います。
平成27年度上地小6年 藤山暖葉さん

100年後の上地の中に、平成の時代を思い出せるような「上地平成の町」を作ったら楽しいと思います。

たとえば、南公園や私たちの上地小学校を今のまま100年後まで残します。同時に、ビルなどを建てずに緑を増やしていきます。大谷公園には、木製のアスレチック施設を入れます。こうして、100年前の平成を振り返ることができる上地、緑豊かな上地の未来が続くといいと思います。
平成27年度上地小6年 辻村和里香さん

ぼくの家近くにあったスーパーがなくなっていました。とても不便に感じるので、100年後の上地には、大きなショッピングモールなど、便利な施設がいっぱい建つといいと思います。

平成27年度上地小6年 半田優さん

新世紀岡崎へのメッセージ
こんな町になったらいいな
100年後の上地

ぼくが考える100年後の岡崎は、乗り物が大きく発展すると思います。岡崎には自動車関係の工場が多く、交通事故を減少させたいと考えるからです。

中でも、岡崎で新たな安全装置が生まれ、「安全な町」として、上地学区そして岡崎が全国に名前を知られるようになってほしいと思います。
平成27年度上地小6年 市丸彰悟さん

100年後には、上地小学校が今とはずいぶん変わっていると思います。たとえば、教室や体育館にはエアコンがつき、床は木ではなくじゅうたんになっているかもしれません。

また、たくさんの建物や遊園地がある町になってほしいです。そうすれば他県からもたくさんの人が来て、もっと上地を知ってもらえるからです。
平成27年度上地小6年 尾崎陽菜さん

100年後の上地は、人と人とのつながりを大切にした、誰とでもコミュニケーションできる町になってほしいと思っています。

なぜなら、学区に住む人たちが気軽にコミュニケーションできれば、きっとみんなが幸せな気持ちで生活できると思うからです。そんな未来の上地になることを願っています。

平成27年度上地小6年 齋藤優真さん



上地学区には文化財も歴史資料も少なく、作成委員会を立ち上げたもののどう作成するのか悩みました。しかし、上地小学校の開校5年後頃から小学校の教職員の皆さんが校務のかたわら、学区の自然や歴史や文化などをまとめられた「ふるさと上地」を参考に無事作成することができました。ありがとうございました。

〔作成委員会〕 朝岡正文/今井敏眞/岩橋可奈子/
海出和則/畔柳真/小浜芳朗/小林武志/佐々木和貴/
杉浦正夫/鈴木孝司/鈴木美智代/高野瀬宏/竹内昭次/
田中正人/豊田恭一/夏目安孝/成瀬忠/兵藤晴保/
松田千秋/三浦国夫/茂刈稔/森田実/八木俊治(50音順)
〔協力者〕 嶋田稔(創作童話)

〔参考資料〕 岡崎若松土地区画整理組合報告書/上地第一特定土地区画整理組合報告書/上地第二特定土地区画整理組合報告書/上地小学校「ふるさと上地」/上地(上地学区学校創立十周年記念誌)

〔表紙写真〕
土地区画整理事業前後の上地学区の航空写真



1 1975年から始まった岡崎上地土地区画整理事業。大きな建設機械が山を削っている



2 3年計画で整備された市営若松荘が完成し1976年に町内会が発足する



3 1983年4月開校を目指し工事が進む上地小学校。周囲にはまだ空き地が多い



4 市内39番目の小学校として岡崎小・福岡小学校から分離した上地小学校の開校式



5 1990年には上地小バレーの男女が全国大会にアベック出場を果たす



6 1990年から手作りで始まった学区親子夏祭り。多くの学区民が参加する(2013年撮影)



2013年の開校30周年を記念して作った人文字。周囲には住宅が密集している



山が動く原因となった国道248号と環状線が交差する上地3丁目交差点(2016年撮影)

上地学区

まちなりたち

若松村、羽根村など5村が合併し、岡崎村大字若松となる

上地村が福岡村と合併し、福岡村大字上地となる

額田郡岡崎村が岡崎市に合併、岡崎市若松町になる

額田郡福岡町が岡崎市に合併、岡崎市上地町になる

医療刑務所が康生通西より現在地に移転

岡崎若松土地区画整理事業が起工

岡崎上地土地区画整理事業が起工：1

市営若松荘が完成：2

若松地区の町名変更を実施

岡崎若松土地区画整理事業が完成

愛知県岡崎勤労福祉会館が開館

上地小学校が開校し、上地学区が誕生(上地四区・上地五区・上地六区・上地八区・若松新町・若松東の6町内会で創立)：3・4

上地学区市民ホーム開設

国道248号と都市計画道路衣浦岡崎線が区画整理事業地内で開通

上地八区から分離して上地九区を設置

竜南中学校開校

上地学区こどもの家開設

上地四区・六区から分離して上地七区を、上地九区から分離して上地十区を設置

上地小女子バレーが全国大会に出場(以後、2016年まで5回出場。男子バレーも1990年以後3回出場)：5

上地地区の町名変更を実施

岡崎上地第一・第二土地区画整理事業が完成

第1回学区親子夏祭りを開催：6

上地五区婦人自主防災クラブが

上地地区婦人自主防災クラブに改組

東海豪雨により砂川が氾濫

若松東地区が岡崎消防団から福岡消防団の管内に編入し学区全域福岡消防団管内になる

南部地域交流センター・よりなんが開館

平成20年8月末豪雨により砂川が氾濫

岡崎市総合学習センター(旧岡崎勤労福祉会館)が開館

上地学区の特色

1962年(昭和37)に岡崎医療刑務所が康生通西から移転してきた当時、奥山田池から大谷池にかけて標高50mを超える山が連なり、タヌキやキツネが出没したそうです。山裾から西側は田畑が続く、人家は旧国道248号沿いに100戸程度ありました。

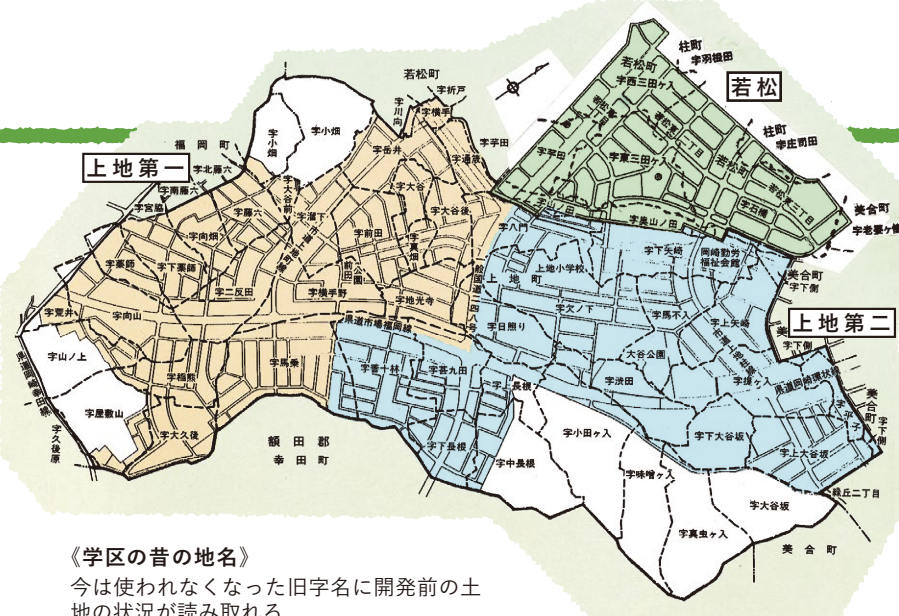
モーターゼーションの発達により交通量の多くなった国道248号の渋滞緩和を図るためバイパスが建設されることになり、その用地確保のため1972年(昭和47)に若松地区から土地区画整理事業が始まりました。山を切り開き、その土砂で低湿地を埋め大規模な宅地造成がされました。まさに「山が動いた!」の開発事業でした。

日本全国から多くの方々が住まいを求めて移転し、1983年(昭和58)4月に1210世帯、人口4369人で上地小学校・上地学区が創立されました。以後、「ふるさと上地」を合言葉に学区民と諸団体が一体となって、学区新年交礼会や学区親子夏祭りなどの諸事業を展開し、融和を図り発展を続けています。

地名の由来

◎上地
江戸時代に存在した「菱池沼」に対して台地上にあることから名付けられたとの伝承があります。

◎若松
矢作川河畔にあったという「若松原」に由来すると、門松を領主に献上していたことに由来するとも言われています。



《学区の昔の地名》

今は使われなくなった旧字名に開発前の土地の状況が読み取れる

DATA

□人	12,353人
□男性	6,189人
□女性	6,164人
□世帯数	4,803世帯
□面積	1.97km ²
[2016年7月1日現在]	

上地学区

まちものがたりマップ

上地学区は平成28年度で創立34年、日本全国からやって来た多くの人びとが暮らす新しい学区です。
学区の皆さんの思いのある場所を挙げてみました。



八上地八景

学校・学区創立6周年をすぎたころ、上地の由緒ある史跡や自然景観、開発目覚ましい都市の姿などを「上地八景」として学区で選定しました。

- 奥山田池
- 国道248号
- 砂川
- 円光山寂静寺
- 百丈山三善寺
- 上地湿原
- 大谷公園
- 岡崎衣浦線

新上地八景

学校・学区創立10周年をすぎたときに一部見直され、改めて「新上地八景」が選定されました。

- 奥山田池
- ふる里上地像
- 砂川
- 円光山寂静寺
- 百丈山三善寺
- 大谷公園
- 憩いの緑道



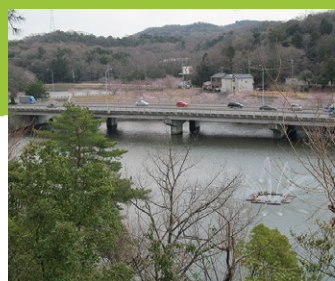
H 藤六のお地藏様
もとは浜街道と鎌倉街道の辻に立っていた。現在は「じぞう公園」東に移設



J 南部地域交流センター・よりなん
2006年の開館以来、多くの市民に利用されている



J うなり石
かつて吉良道大谷坂の山中にあり、奇声で旅人を震えあがらせた。現在は上地八幡宮に移設



C 大谷公園
土地区画整理事業で緑地帯として保存されたエリア。キャンプ場などが整備されている



B 奥山田池
灌漑用池として整備された。今は奥山田池園地として市民の散策の場となっている



A 岡崎市総合学習センター
1983年に愛知県岡崎労働福祉会館として開館。2010年に閉館し翌年から総合学習センターとして活用



G 上地東緑道/上地西緑道
土地区画整理事業とともに延長1.7kmにわたって整備。安全な通学路として子どもたちが行き交い、また散策路としても利用されている



F 岡崎医療刑務所
全国4か所の医療刑務所の一つ。名古屋刑務所岡崎医療刑務支所として1962年に康生通西から移転。1971年に現在の施設名になる



E ふる里上地像
上地小学校開校・上地学区創立10周年を記念して小学校に設置された



D 大谷公園展望台
公園内に古窯跡があることから勾玉の形の丘を造成し、「過去・未来を見据える展望台」として銅鐸をモチーフに建設

上地のむかしばなし

山が動く前の上地の風景や人々の暮らしが垣間見える話が、「創作童話」となって今も学区に語り継がれています。

うなり石

むかしの大谷坂は、大きい木がたくさん生えておって、昼でも薄暗いところでした。ここを、細くてじめじめした吉良道が通っていました。

ある年の秋、上地のごへえさは、馬頭の村のお祭りに行って、夜おそく吉良道を帰ってききました。お酒をよばれて一ぱい飲んで、鼻歌を歌いながらやって来しました。ちょうど、峠にさしかかったところ、風がビュウーと吹いてきて、ちようちんのあかりが、ぱっと消えてしまいました。

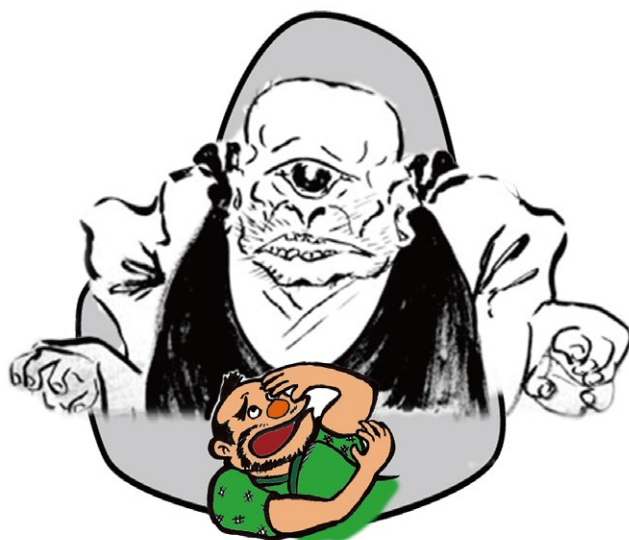
「ううー。ううー」
と、女の人のうなる声が聞こえました。
「ひやー、お、おばけー」
ごへえさは、おみやげのすしを投げ捨て、ころがるようにして、村へ帰りました。
「お、お、女の声だった……」
「そんなばかなことがあるもんか。おまえさん、きつとキツネにばかされただらあ」
村の人は、はじめ、ごへえさの言うことを信用しませんでした。
「わしは、ほんとうに、女の人の泣き声を、この耳で聞いただ」
「よし、そんなに言うなら、おれたちが行って見てきてやる」
元気のいい若い衆が三人、次の日の晩に、大谷坂へいさんで出かけていきました。

「ううー。ううー」

「あ、聞こえる聞こえる」
あたりを見まわしましたが、だれもいません。
「おかしいなあ」
「こつちだこつちだ」
声のする方へ行ってみると、いきなり、黒い入道が

「ううー。ううー」
と、声を出しました。
「ひやー、出、出、出たーあー」
若い衆は、みんな逃げ帰ってしまいました。そして、三人とも、熱を出して寝こんでしまいました。
あくる日、村の人が明るくなってから行ってみると、石が立っているだけでした。その頃から、この石をだれ言うとなく「うなり石」「うなり石」と言うようになりました。

村一番の力持ちのかんすけは、これを聞いてだまっておれませんでした。
「なに、石がうなる。そんなばかなことがあるもんか。おれが、正体をあばいてやる。みんなついてこい」
と、こんどは屋間出かけて行きました。
「なんだ、ただの石じゃねえか。うちの庭



石にちようどいい。ほって運んでいこう」
「そんなこと、やめたほうがいいぞ」
「なに、かまうもんか」
ざくざくわを入れたとたん、石が「ギヤーギヤー」
かんすけは、くわをほっぽりだしてにげて帰りました。見ていた人たちも、真っ青になってかけ出しました。
かんすけも、やはりわけのわからん病気になるって、寝こんでしまいました。
こんなことがあったので、村の衆は「神主」さんにたのんで、おがんでもらいました。そうしたら、うなり声はぱたりととまったそうです。それでも大谷坂を通るとき、気持ちが悪いので、この石は上地八幡さんへ運んできて、すえたということです。
この「うなり石」は、今でも上地八幡さんのけいだいにあります。

雪の上の

ちいさなあしあと

少し昔のお話です。上地の村に平工門さんという人が住んでいました。平工門さんは、いつもいつも、三善寺のお地藏さんにお参りしていました。
「どうか、今日も一日、じょうぶで働けますようにお願いします」
「今年も地震や火事が起こりませんように。どうか、上地の村に悪い病気がはやりませんように、お願いします」
雨が降っても、風が吹いても、忘れずに

お参りしていました。
ある年の冬のことです。その年はいつもより寒く、冷たい風がよく吹きました。
「ばあさんや、今夜はばかに冷えるなあ」
「そうすねえ、おじいさん。黒い雲が出てきたから、雪になるかもしれないねえ」
「こんな晩は、早く寝るにかぎる」
平工門さんは、いつもより早く布団にもぐりこみました。おばあさんも、戸締りをたしかめて、やすみました。遠くの方で、「ウオーン、ウオーン」
と、のら犬の泣き声が聞こえました。それから、どのくらい眠ったでしょう。どこかで呼ぶ声がしました。



「平工門、起きてみよ。平工門、起きてみよ」
おじいさんは、眠い目をこすりました。（だれかがわしを呼んだようだが、こんな夜中に呼ぶはずがないな）
平工門さんは、そう思って、ぐっすり眠ってしまいました。すると、また、
「平工門、起きてみよ。平工門、起きてみよ」
夢かほんとうか、よくわかりません。でも、こんどは起き上がりました。
「ばあさんや、今、だれかがわしをよんだようだが……」
「いやですよ、おじいさん。子どもみたいに寝ぼけて……。こんな夜中にだれが呼ぶものですか」
「そうだなあ。それにしても、たしかに聞こえたが……」
そう言っておじいさんは、そっと、雨戸のすき間から外をのぞいて驚きました。
「火、火だー」
「え？ ああ、火、火……。灰小屋がまっか……」
おばあさんは、腰を抜かしそうです。
「ばあさん、水、水だ」
おじいさんは言うが早いか、はだしでそとへ飛び出しました。庭のすみのかめから、手桶に水を汲んで、いきおいよく火にかけました。
ジュ、ジュ、ジュ、ジュ。
「それ、もう少しだ、ばあさん。水だ、水だ」
火は、白い煙をあげて、間もなく消えました。
「あびつくりした」
「もし、知らんでおったら、母屋まで火が付いてしまうところでしたねえ」
「それにしても、ふしぎなことがあるものだ。わしを起こしてくれたのは、いったいだれだろう」
朝、起きてみると、あたり一面まっ白な雪でした。
「おじいさん、おじいさん。ほら、雪の上に



だれかの足あとがついていますよ」
「おや、これは小さい子の足あとだ。おかしいな、孫の八百吉が起きるはずがないし」
そう言いながら、おじいさんが、小さな足あとをたどって行きますと、三善寺の方へ続いています。
「おやおや、こんな方へ行っておるが……」
足あととは、三善寺のお地藏さんの前で消えていました。おじいさんは、はっと気が付きました。（ありがとうございます。ありがとうございます）と、なんべんもおがみました。
でも、お地藏さんは、いつものようにやさしいお顔で立っているだけでした。
「ばあさんや、ゆうべ、わしを起こしてくれたのは、あのお地藏さんだったよ」
「そうすねえ、お地藏さんが火事を教えてくれたのですねえ。ありがたいことですよ」
おじいさんは、子どもの平一さんや、孫の八百吉さんに、いつもこう言っていました。
「わしの家は、三善寺のお地藏さんに助けてもらったなあ。お礼に、おぶくろさんをあげることだけは、忘れてくれるなよ」
それから、いつも、地藏さんの祭りには、おぶくろさんとして、お米を一升あげているそうです。
*これは、上地町の畔柳八百吉さんが、子どものころ、おじいさんから聞いた話をもとにしたものです